

広島文教国文往来

横山邦治

○事実は書くところなるでしょう。平成八年五月十九日午後八時ごろ、友久先生から牛田のマンションに電話、「どうも湯之さんの容態が悪いらしい、私もすぐ飛び出すが大林だから時間がかかるかも知れない」、反射的に身仕度をしてマンションを飛び出し、タクシーに飛び乗って河石病院に直行、薄暮という時刻で病院の裏口から三階の病室に入るまですれ違う人も居ない状況、病室内には奥さんと上の娘さんが付いておられて、湯之上さんは意識のない有様でした。

○当日牛田のマンションに居たのは、オリゼミとかケント大学からの来客とかの公的なことと、両親が入院生活に入っていてその諸難事とがゴチャゴチャになっていて何の用でそこに居たのか定かでないのですが、とにかく牛田のマンションに居たのです。友久先生は湯之上さんの奥さんから連絡を受けて鈴張へ電話して下さり、牛田というので再び電話を

下さったようです。奥さんは学科長である菅原敬三先生と、広島大学の中世文芸研究会以来の学友である友久先生とに危篤状況を告げられたようです。私がたまたま牛田に居たので即刻馳せつけることが出来たのですが、その時ももちろん友久先生の姿は見えませんでした。ベットの上の湯之上さんは、点滴その他で手と足の一部が包帯でグルグル巻きに固定されていました、足部が少し腫れているかなと思える以外には普段の顔容で、息遣いが少し荒いぐらいのものでした。ただお医者さんと看護婦さんとがawatadしく出入りして、心臓の鼓動をチェックする心電図モニターの緑色の曲線が乱調子で、何かただならない様子を示しています。私が入っていくと、湯之上さんに声を掛け続けられていた奥さんは、まだ連絡しなくてはいいところがあるとかで、一刻病室を出ていかれたのですが、私

まだ大丈夫ですよなど申したので安心されたのでしよう。ところが私の言は気休めに過ぎなくて、実のところ私自身は人間の臨終に間に合うという直接体験をしたことがないのでした。私の家では、私が生まれてからは不思議と葬式という行事がなくて、当然肉親の臨終の枕頭に座するということはなかったのです。昨年の四月七日に末弟を失ったのですが、食道癌の転移で危篤状態となって二晩くらいは枕頭に列座していたのですが、疲れ果ててまだ大丈夫だろうというので身内の一人を残して帰宅していた夜に亡くなり、夜明方に緊急連絡があつて馳け付けた時には息絶えていて、臨終に間に合わなかったという経験のみがあつて、その時の印象からまだ大丈夫だと思つたのです。でも確かに緑の曲線が乱調子であります。時々一本の線になってまた一定のリズムを繰り返すのですが、そのリズムがブレルのです。苦しいという表情はなくて、時々大きな息をされるのが痛ましい思いをさせるのですが、苦悶の表情は全くないのです。弟の時もそうだったのですが、肝性脳症というのでしょうか、意識がない状態で安らかな寝顔なのです。弟のばあいはムーンフェイスになり目が流れるという現象があ

りましたが、湯之上さんにはそれが見られませんでしたので、緑の曲線は乱調子でも、まだまだ大丈夫だ”と思ったのでした。私としてはただ見守る以外に何もすることはできません。湯之上さんの病いの元凶が私の病と同じC型肝炎であるという思いで、自分自身の最後の姿はかくもあろうかという感情移入をしながら、自分自身がこのようになったらどう我が身を処したらいいのかなどと不謹慎なことを考えたりで、ある意味では自分自身の中に閉じ籠もった想念で見守っていたかと思うのです。C型肝炎が肝硬変となり、やがて肝臓を発症して末期には肝性脳症になるというのは、C型肝炎患者の極めて典型的な病状移行なのです。湯之上さんの病状が自分自身の最終局面の姿とダブルのは止むを得ないことです。凝然と立ち尽して見守り続ける以外に、私自身としては何も出来ないのです。声もかけられませんでした。

○奥さんが帰ってこられて再び枕頭に待して声を掛け続けられるのですが、湯之上さんの反応はありません。あまり時間が過ぎない間に再び緑の曲線に直線が交じるようになり、ツ―と直線が続いて再び曲線が乱調子になるという状況が何度か繰り返して生起していま

す。その直線がいくら長く続いたと思っただけ、枕頭のお医者さんが非常に丁寧な態度で頭を下げて低い沈痛な声で何か言われました。その言葉をよく記憶していないのですが、臨終を告げる言葉であつたでしょう。そしておもむろに湯之上さんの身体に取り付けてある医療器具を取り外され始めました。そのかすかな音が聞える以外は、完全な静寂が病室に存在していました。この静寂の中に居るのは家族だけであるべきだと咄嗟に私は思いました。そっと病室を抜け出ていました。夜です。病室の廊下も静寂の時刻が流れていました。丁度その時菅原先生をトイレで見かけ、湯之上さんの死を告げました。その後、医務室の医師から湯之上さんの死の確認を得て、学園に連絡しようとして一階に降りかけた所に友久さんがあわただしく飛び込んでこられました。死を告げると凝然と立ち尽されたまましばらく身動きされませんでした。そして病室から一寸出て来られた奥さんに頭を下げられた時は、言葉が出ないようでした。私は何か自分自身の死を見詰めていたような妙な錯覚が覚めないまま、一方では妙な具合に冷静で明日の行事（オリゼミの初日に当るのでしたでしょう）があるからと、学園への連絡を済

ませた後は、友久さんたちに仲間たちへの連絡などの後事を託して牛田に帰ったのでした。タクシーを拾うために河石病院の前に待っている間の、街中の薄明りの中に浮き上る白っぽいビル姿が妙に印象的でした。それは死の色とも思えて寒くもないのに身ぶるいしたことです。そして危篤状態というので入院させたのだけれど、不思議に生を保っている父の、しかし確実に迫ってきているはずの死を想起したのでした。（父重邦は、あれからずいぶん生き永らえて、それでもこの九月十八日には死去しました。明治四十三年生まれの八十七年の生涯でありました。老衰による死ですから極めて安らかな臨終で、これも私自身が見届けるという具合には参りませんが、湯之上さんの臨終に侍したというのは、私にとって極めて稀な体験として残るのかも知れません。）

○湯之上先生の葬儀は五月二十二日でした。友引とかいろいろと事情があつてこの日に決まったようです。沢山の卒業生も集まって盛大な葬儀でした。その場で弔辞を述べさせていただいたのですが、場違いだと思います。がらもここに再録させていただきます。

弔 辞

五月の連休前に再入院された湯之上先生をお見舞い申し上げた時の、先生の最後のお言葉は、一ヶ月療養したら退院出来るから、教壇に立つということでありました。教壇に立つて国文学のことを学生に語りかけることが、湯之上先生の本当に生きる喜びであったのだと、それが生き甲斐であったのだと今に思っていることでもあります。国文学のことを語って倦むことのなかった湯之上先生の面影が眼前に彷彿として参ります。

広島文教女子大学が湯之上先生と縁を結んだのは、昭和四十八年のことでありました。当時湯之上先生は鈴峯女子高等学校を一身上の都合で退職され、YMCA学園の専任講師をしておられたのですが、本学において古典の国文学の担当教官を必要とする事態となり、懇請して御赴任いただいたのです。先生は、昭和二十六年三月に広島高師文科第一部を御卒業され、向学の念止みがたく、昭和二十九年広島大学文学部国語学国文学専攻に編入学されたのですが、当時の新制大学の教授内容に失望されて退学された後、あれこれの高等学校で教鞭を執っておられました。然し先生

には国文学に関する学識が極めて高いと中世文学界における多くの業績によって博く評価されておられたことから、本学への就任要請となったのでありました。当時住まわれていた己斐の寿司屋さんでお目にかかり、御就任の要請が研究のことに移って話し込んだことを想い出します。先生のお名前は早苗と申します。女性としても通用する名前前で、研究上の書簡連絡では女性だと思ひ込んでいる人もいて、大変親切に教えて下さるのだけれど、学会でお目にかかってお礼申し上げたら、君は男かと言って驚かれ、それ以来あまり親切ではなくなったなど笑い話もしておられました。女性の国文学研究者など大変少いころの話であります。

先生の学問は、高師時代から宮沢賢治研究で頭角を現わしておられたのですが、新制大に編入後は、田植歌の研究にも興味を示されたのです。やがて日本における連歌研究の先達であり、研究体系の構築者でもある金子金治郎先生に私淑され、金子先生の数多くのお弟子さんの中では唯一の連歌研究の専門家となられたのです。偉大な先生と全く研究を同一にするというのは、ある意味で大変にキツイことなのですが、湯之上先生は敢えて

その困難な道を選ばれて、金子先生の連歌研究の衣鉢を継ぐことを終生の目標として、数多くの論稿を発表して来られました。昭和六十年に桜楓社から出版された『発句帳―資料と研究―』は、諸本研究の徹底から従来の謬説を正されたものでしたし、平成二年に和泉書院から出版された『百番連歌合―救済周阿心敬―』は連歌の新しい解釈の在り方を示されとともに学界の高い評価を得られたものです。しかし先生の本意はそこ丈に止まっていたのではありません。金子先生の御研究を發展させて宗祇論を完成させることが終生の願いであり、そのための膨大な作業は着々と積み重ねられていたのです。然し天は先生に時間を与えませんでした。C型肝炎という、現状では不治の病いが何時からか自覚することなく、先生の身体を冒していたのです。同じC型肝炎を病みながら効果顕著ならざる治療を続けている同志として、近代医学の進歩は、やがてC型肝炎ウイルスを退治する治療法を開発するに違いないから、それまで生きてやりましよう、私どもは励まし合っていたのですが、今は叶わぬ願いとなってしまうました。天は無情です。先生の飯尾宗祇論が出現しなかったのは、日本の連歌学界にとっても

大きな損失であると今更のごとくに痛感する
のであります。

本学において、先生は国文学科長、附属図書館長の要職を歴任され、更に本年からは学園の役員として武田学干理事長のよき相談相手として今後の活躍が大いに期待されていたのであります。今ここに先生をお送り申し上げることになりましたのは、あらゆる面で大変残念なことでありました。残念なことではあります。今更繰言を申す時ではありますまい。

楽しい講義の数々、有益な論稿の数々、それらを今ここに想起することによって、湯之上先生の生前のお姿を偲び、お別れの言葉といたします。

平成八年五月二十二日

共に学び、共に語った者として

広島文教女子大学長

横山 邦治

○死の告示ばかりの往来ものになってしまいました。そうですが、清瀬良一先生も去る四月十九日午前零時五十八分に死去されました。病名は

間質性肺炎というので、急逝という言葉がぴったりの死であったようです。本学での教職歴は昭和五十一年から五十七年までと長くないのですが、大学院が出来る前までの本学の国語学の教授として活躍された方です。本学での在職期間の印象が深かったのでしょうか、奥さんから弔辞を読むようにと依頼された四月三十日のお別れの会で読ませていただいた弔辞も再録させていただきます。

弔 辞

清瀬先生、先生のお声を最後に聞いたのは、一ヶ月ぐらい前のことだったでしょうか。突然お電話を下さって、例の一寸せき込むような調子で、『元気！湯之上さんが病気じゃそうだが、どんな！』と元気よく話しかけて下さいました。長い電話ではありませんでしたが、お互いの消息を確かめ合う電話になりました。あのお元気な声の先生が、今、ここで骨壺に入ってしまったておられるというのは、私には信じられません。御入院がわずか二日間であつたと聞きましたが、私には驚き以外の何ものでもありません。

清瀬先生に初めてお目にかかったのは、先生が広島大学の国語学国文学教室の助手をし

ておられる時、学生としてでありました。研究室を雑談の場とする不心得者が多かったころのこととて、叱責されたことも多かったのですが、研究の在り方とか学会の運営とかで色々御指導いただいたことを思い出します。

お酒の呑み方も少しは教わったことがあるようです。諸事几帳面な先生で、一方細事にこだわらない先生でもありました。大きな声も聞きましたが、やさしい声も聞いたのでした。

先生は一時PL短大で研究教育に従事しておられたのですが、信者であられたわけでもないで、昭和五十二年に広島文教女子大学の国語学担当の教授として御赴任いただき、私どもと一緒に研究教育のことに尽していただきました。天草版平家の研究を生涯の仕事としておられましたので、昭和五十七年十二月に出版された『天草版平家物語の基礎的研究』の礎稿も文教御在職中にまとめられたようであります。御苦心しておられるお話をあれこれ聞かせていただいた記憶があります。平家物語を口語訳していく過程が謎のまま残っているらしいのですが、その口語訳した原平家が何かを多角的に博搜しておられた姿を想い出します。やがて先生は請われて昭和五十七年に愛知教育大学に御赴任なさったの

ですが、広島は住み易いところだからと、御停年後は再び広島に帰られて、鈴峯女子短期大学の教授として御勤務されていました。昔のことをなつかしがつて、よく文教の方にも御連絡いただいていたのです。ありがたいうことであります。先週の火曜日には、御講義をされたとかお聞きいたしました。最後まで国語学者としての姿を見せて下さったのです。教育者としての姿を見せて下さったのです。清瀬先生の、少し上をむいて精悍でやや浅黒い顔を紅潮させて説かれる講義の様子を想い浮べ、今更のごとく哀惜の念にたえません。先生の御冥福を心よりお祈りします。清瀬先生の御教導をいただいた者として一言申し上げました。

平成八年四月二十日

広島文教女子大学長

横山 邦治

○今、司馬遼太郎の著作にはまっています。小説以外の本です。歴史を語るものが多いのですが、歴史を語るといのは、死者の跡を追尋するということでもあるようです。その人の死によって定まった歴史上の評価を司馬

流に云々する話が多く出て来て、そこまでに生きた人が生き生きと語られると、人間の生き方がいかにあるべきかと考えることが多くなっています。『土への話』（中央公論社刊）にも、「開高健への弔辞」などあって、今さらのように弔辞の名手だなと感銘するのです。その人の死が、司馬氏にいかなる意味を持ったのかがよく判るのです。私自身にとっても、湯之上さんの死が、父の死が、ジワジワと生きていることの意味を教えてくれているように思う昨今です。六十五才という年令を迎えて、今までの生き様とこれからの生とを考えることが多くなっています。想いが内に内に向って参ります。そこで人間の深みが出来るといのですが、凡骨の悲しさでマイナスで考えることが多いようです。深さよりは浅さを認識します。しかし人間が生きていく以上は、何才になってもプラス思考がなくてはならないでしょう。目下、鈴張の山の中の極楽寺と俗称する墓地に、父の墓造りを考えています。極楽寺という地名は、何時のころかそういう名の寺院があったところで（いわゆるツボンドが2ヶ所残っています。長寛寺というお寺の墓地もありますので、明治以前は長寛寺さんの前身の寺院があったのでしょうか）、そこ

がどうしたことか今は、墓地のある山と私の家の私有地になっていて祖父以来の墓があるのです。もっとも山あいの僅かな畑地は農地解放されて他人様の土地になっています。そこからは鈴張の谷間全域が見渡されて、奥津城の場としてはいいところなので、やがて私自身もそこに入ると考えながらの墓造りです。墓碑銘を「涅槃寂靜」にしようかと考えています。幼時から聞きなれている感じの「寂滅為楽」という言葉が好きで、それを墓碑銘にしようとしたら、親戚のお寺さんから自力本願に近い言葉で浄土真宗的ではない（浄土真宗以外の宗派というので余宗という言葉を使われました）。と言われ、元来無信心ながら安芸門徒の範疇から外れるという気持ちもないので、妥協の産物での結論であります。浄土真宗では「俱会一処」という言葉が墓碑銘として一般的なのですが、現世ではあまり仲好くもなかった者が「皆々一緒に仲好くしましょ」と強制連行されるような感じで、一寸抵抗があったのです。まあそんな墓造りという俗事も、生と死とを考えさせられる機縁とはなるのです。

○湯之上さんの死という弔事にかこつけて私事をあれこれ書き付けましたが、序でのこと

に私事を更に述べさせていただきます。父の死の前後に甥や姪の慶事が続いておりまして、九月十四日には危篤の父の状態にハラハラしながら東京での姪の結婚式に列席したのでした。葬式の日にお爺ちゃんは孫のことを考へて生きてくれたのだらうなど話し合ったこととでありました。そしてこの十一月十七日には、仏滅の日ではありませんが（実は仏滅の日を私も口出してわざわざ選んだのです。十一月と言えば結婚シーズンだろうけれど、仏滅と言えば一般に避けて通るので日曜日でも会場の確保が楽であろうという下心です。

それは正に適中で、安直なので結構結婚式の多い私学共済のガーデンパレスでありながら、日曜日だというのは結婚式は一組だけでありました。娘の美紀が結婚してしまいました。娘は文教の国文学科の卒業生ですから、「文教国文学」に無縁ではないのですが、だからここに悪口はあまり書けないのですが、不出来の娘で絶対に「文教国文学」は読まないという自信があるものですから、ここに勝手なことを書かせていただきます。三十近くなっても一向に色恋沙汰がないのを心配して、私は腰重だったのですが、家内がアレコレ心配して早計にも見合いをさせてしまつて、結果

的には三重県の名張という僻陬の地（これは鈴張の住人が他を評する言葉としては、笑われる言葉でありましょう。）に住んでいる男のところに連れ去られてしまいました。向うの御両親との初対面場で、三男坊であることだけが取得など申す引つ込みのつかない失言を口走ったものですから、娘の信用を全く失つてしまひまして、以後一切の発言権を奪取された結果、私は全くの豊稜敷（この言葉が妥当を欠く表現であることは知っているのですが、私の落ち込んだ状況を表現するのにこれ以上ピッタリの言葉は見出すことは出来ません。言葉狩りという現象も日本語の表現力を弱めるということもありますので、どなたか私の窮情を表現するに適當な語を教示下さればと申して、心を痛めながらこの言葉を使わせていただきます。）で人前婚なる結婚式に参列させていただいたのです。借りてきた案山子のごとくに数時間を過したのですが、無言の業の何と重苦しかったことよでありました。さて鈴張のだった広だけの陋屋に老化現象顕著なる夫婦二人だけで過ごすというのは、何とも間の持てないものであります。家内も娘が居なくなつて料理する意欲を喪失したごとくでありまして、今晚も牛肉

の細切れを徹底的にポイル（〇―一五七恐怖症が家内には今も存在しています。）した山盛りを前に、御飯に醬油をかけて食ったことがあるかと悪タレを申しました。こんな固い牛肉の切れ端を噛み砕くくらいなら、醬油飯（これは私にとって、貧しくまづいと同意語の表現でした。）を食った方がいいという反語であります。ところが七才も年令が違ひますと、五十年前の飢餓状況の体験に大きな断層があるのです。家内の反応は、学生時代の登校前に大急ぎで食べた醬油飯はおいしかったというものでありました。それは、ソクサと早喰いの飯でありまして、飢餓状況でのおかずのない代りに醬油ぶっかけて食べる飯とは違うのでありますが、そう言われれば醬油飯もおいしかったなと今様醬油飯を喰つてみたのです。どうも五十年前の香ばしさがないようにも感じられたのです（炊飯器で炊く御飯ですから、カマド飯に比べるとマズイのかも知れませんが）が、まずはこれで暫時休戦であります。とは申しまして何だか娘を略奪された男親の典型を演じているようで、少し滑稽であります。公私ともに昨年から何ともことの多いことであります。

○今夏、平成八年の八月末日、院生四名と〇

G 一名の六人で、『おくのほそ道』行脚未踏破の越後縦断を試みたのですが、村上市と颯ヶ関との間にある葡萄峠の旧道で道を見失ない、正に遭難寸前の目に会ったのです。途中で諦めて引き返したからよかったのですが、

ことでありました。とは申しましても、事にならなくてヨカッタと申すべきではありません。葡萄峠の宿題だけが残りましたが、文教での『おくのほそ道』行脚もこれで終了であります。

もしそのまま何時ものように突進していたら、全国紙の遭難記事になるという事になっていたかも知れないのでした。芭蕉たちが通ったのは三百五十年前としても、戊辰戦争で幕府軍が移動したに違いない街道なのですが、立派な国道七号線のトンネルの上にあるはずの道が消失しているのです。街道行脚二十数年で、こんな危険な目に会ったのは始めてのこととで、こちらの調査不足は棚に上げて、道路行政や林野行政に対する不満を爆発させたことでありました。昔ながらの落葉樹の林の中では道が辛うじて残っているのですが、戦後急速に推進させられた植林事業によると思われる杉林の中に入ると、全く道が消えているのです。恐らくは生態系全体の問題だと思うのですが、その学問的解明は生物学の研究者にお願いしなくてはならないのですが、素人論議で申せば、人間の作った道を、人間のさかしらでこわしてしまっていると言えるようです。街道行脚愛好者の私としては、残念な

○「文教国文学」の第三十五・六号は、湯之上早苗先生の追悼特集号になるようです。思ひもかけず多くの人から寄稿があったと仄聞しています。うれしいことであります。これは「死」が「生」に転生している現象だと存じます。文教の未来を示していると信じたいものです。発案者らしい友定先生と編集担当の古田先生の労を多といたします。文教国文学に関係して下さっている皆さん、ありがとうございます。

平成八年十一月二十日